



第一章

都から美濃国へと向かうには、近江路をまず東へ、瀬田の長橋を渡り、鏡山を越え、老曾の森を通る。ここまでやってくると伊吹山から吹き下ろす山風がにわかになくなる。土の濃い匂いのする風だった。夏の初めであった。山の青葉はもくもくと生い茂り、山風が吹くと梢が銀色に波打つような時分である。海道沿いに広がる田には水が入ったばかりとみえ、山風にさざ波を立てていた。泥の匂いも濃く、蛙の鳴き声も随分と大きくなった。

僧・光陰が諸国行脚の身となり、嵯峨清涼寺を出てから一ヶ月余りが過ぎていた。目指す美濃国野間庄内海は目前に迫っていた。そう思うと気が急いた。

これまでは、辻に打ち棄てられた地蔵を見るや、それを建立しなおし、道沿いに行き倒れを見るや、衣をかけてやっては御法の一つも唱えて功德を積み、旅の僧らしく、自らの行いに一つ一つ時間をかけて、美濃国まで旅をしてきた。だが、とうとう不破の関を越えるや、足取りは自ずと早くなった。

美濃国野間庄内海――何故もっと早く来なかったのだろう、と光陰は思った。

不破の関を歩き過ぎ、海道を下り始めた頃、日が暮れ始めた。

光陰の足は早くなる。墨染めの衣の袖をはためかせ、裾をばたつかせ、光陰は道を急いだ。しかし背後から夕日を浴びて、光陰の影はみるみるうちに伸びていく。やがて、日は山に落ち、影は夜の闇の中に溶けた。

ふと顔を挙げたとき、弓のような細い月が浮かんでいるのが見えて、光陰はようやく諦めて足取りをゆるめた。息があがっていた。

宿をとらなければならない、と光陰は思った。

――今日には内海に辿り着きたかったが。

光陰はそう独りごちた。

いずこからともなく山犬の遠吠えが聞こえた。一つ、また一つ。

光陰は振り返った。夜の山道は何も見えない。土の匂いがするばかりである。

光陰は振り返り振り返りしつつ、そろそろと歩き出した。袂に手を入れ、皆水晶の数珠を爪繰りながら、口の中で御法を唱えた。夜道に山犬の遠吠えと読経の低い声が幾度も重なった。

――もし、そこなる御僧。

不意に声が聞こえた。女の吐息のような声である。

光陰は辺りを見回したが、灯りの一つも見えない夜の道である。人の気配も感じられない。

――もし、旅の御僧。

声はそう繰り返した。今度は耳元でささやくようであった。

――汝には我が姿の見えるようだが、それがしには汝の姿が見えぬ。何処よりそれがしを呼ぶか。

光陰がそう言うと、今度は車の軋む音が聞こえてきた。車軸のぎりりと唸る音である。今度のははっきりと、光陰の背後からであった。そして、それは徐々に近付いてくるのがわかった。

やがてそれは月明かりに照らされ、闇から浮かび上がるように、おもむろに光陰の前に現れた

。板張りの粗末な荷車を、六歳程と見える童女が牽いていた。禿の顔にかかるのを、小さな手で払いのけながら、息を弾ませて車を牽いている。錦の衣を着ているところは、公家の童女とも思われた。白い顔に、紅を差した唇が妙に浮き目立ち、そんな童女が牛や馬のように荷車を牽く姿は奇妙に思われた。

光陰が近付こうとすると、童女ははっと足を止めた。光陰をじっと見上げて視線をはずそうとしない。

光陰は構わず、荷車の中を覗き込んだ。女の小袖が丸まっていた。白地の流水紋に源氏車の小袖である。

さては女主人に頼まれた反物を買って帰る途中に難儀でもしているのか、と光陰は思った。光陰は少しでも荷を担いでやるつもりで、荷車の中の小袖に手を伸ばした。ところがこれを掴みあげようとする、思い手応えがあった。小袖の下に人の躰があった。

力任せに小袖を剥ぎ取ってまず最初に見えたのは、長い髪のばらばらと零れ落ちる様だった。そこには女がいた。白い顔の三十路ばかりの女である。琵琶を赤子のように抱きかかえていた

。女は光陰のほうを見た。菩薩のような半眼だった。盲目だった。女は言った。

――もし、旅の御僧。

それはさっき光陰が闇の中に聞いた声と同じ声だった。か細い絹糸のような声である。よもや魔縁化生の者に出遭ったかと光陰は息を呑んだ。

――かような夜道に何処に参りますや。この辺りは夜盗、山犬、虎狼の類の棲む処に御座ります

。女はささやくように言った。そのように尋ねられて初めて、光陰はこれがどこぞの宿の遊君であることに気付いた。盲目の半眼の睫毛の黒々として、そこには柔らかな茨の棘に露が落ちたようである。首筋の白粉が汗で落ちかけている。そこに長い髪の毛がべっとりと張り付いていた

。光陰は答えた。

――日の高いうちに野間の内海へ参るつもりであったが、この通りだ。この辺りに宿る処はあるか。

すると徐に女は諸手を光陰の顔に伸ばした。思わずのけぞる光陰の顔になお追いつがり、白い指を、眉根、鼻筋、口の端に這わせた。冷たい蛇の腹の感触の如くであった。

女は言った。

――おお、おお、これはうるわしの若殿や。

光陰は首を傾げた。

――汝はそれがしの顔がわかるか。

――わかりますとも、尊き血筋の殿御に御座ります。

光陰は首を振った。

――残念ながら、それがしは嵯峨清涼寺の僧である。若いには違いないが、汝の思うような若殿

ではない。

すると、女は、くくくっと鳩の鳴くような声で笑った。

――宿る処ならこの程近く。我の侍る宿が御座ります。そこにて御休息召されませ。

――ならばそうしよう。案内してくれるか。

光陰がそう答えると、女は手招きして車を牽いていた童女を呼んだ。童女は荷台にひらりと跳び乗ると、女の膝の上に座った。そして女は手探りで、童女の額の汗を袖で拭い、手ぐしでその切り髪を梳いてやった。

――童女も汝を乗せて車を牽くのはさぞ難儀であろう。

光陰が言うと女は答えた。

――我はかようなる身。自身で歩くことのできざるに、こうして人に車を牽かせて歩きます。

女は光陰に笑いかけた。真っ赤な牡丹のような厚い唇から白い歯が覗いた。

――宿はこのすぐ近くに御座ります。どうか、功德を積むと思うて、車を牽いてくださりませ。

光陰は、しばし戸惑ったが、すぐに了解して墨染めの衣の袖を捲り、裾をたくし上げると、車の柄を握った。前に重心をかけると、それはまるで氷の上を滑るように静かに動き出した。

まるで重さを感じない。誰も乗っていないかのようなのである。歩くほどに光陰はやがて、振り返る勇気を失っていった。振り返ったら最後、そこには誰もいないのではなかろうか。さもなければ、魔縁化生の類の地獄に落とそうと待ち構えているのではないか、そのように思った。

途端、女が声をかけた。

――その橋を渡ってすぐに小御門が御座ります。そこに車を着ければ、あとは童女たちが灯明をつけ、御身の夜具の用意を致します。

光陰は振り返らないままで答えた。

――それは有難い。ところでその宿の名は何と申すか。

女は答えた。

――アフハカ……。

光陰は思わず振り返った。女は琵琶を抱きかかえ、菩薩のように光陰にほほえみかけた。

――美濃国、青墓の宿に御座ります……。